

活での具体的な不満の解決法を本人に指導するとともに、家族に対しては叱責より賞賛によって望ましい行動を定着させてゆくように助言を行っている。将来的には社会生活訓練なども必要であると思われる。

本例は2例とも難治性の神経症様症状を呈していたが、学習障害の二次的情緒障害に基づく症状であった。学習障害者には通常の神経症患者に用いられるような洞察的な精神療法は無効なことが多く、認知発達のアンパランスに合わせて家庭、学校、職場などの環境を調整したり、生活の枠付けや社会生活訓練などが必要である。したがって小児期のみならず、思春期や青年期、成人に達した症例についても、学習障害という視点から診断や治療方針の検討を要する症例があることを指摘した。

#### 4) 身体接触を求める分裂病患者について

田村 絹代	(五日町病院)
伊藤 陽・茂野 良一	(新潟大学精神科)
田辺 洋之	(長岡赤十字病院 精神科)
三浦まゆみ	(新潟大学保健 管理センター)
稲月 原	(小出本田病院)
角田 典穂	(長岡保養園)
丸山 公男・佐久間友則	(新潟信愛病院)
田辺 瑞穂	(国立療養所犀潟 病院)
関 美好	(松浜病院)
小熊 隆夫	(松浜病院)

第2報では、母親に対する身体接触行動が認められた32例の分裂病患者の臨床特徴について報告した。今回はそのような行動が認められた症例(以下「(+群)」)と認められない症例(以下「(-群)」)とを比較検討した。

【方法】外来通院中の患者で、従来診断による「分裂病」の診断が確定している患者を対象とし、'93年4月1日～'94年3月31日にアンケート調査を実施した。“身体接触”の定義は、触る、撫でる、軽くたたく、抱きつく、一緒の布団に入る等で、性行動や暴力は除外した。対象患者のうち、調査を見合わせた者、診断未確定例、合併症のある者計33名を除外した残り190名について調査した(男性96名、女性94名)。

【結果】①(+群)は32名、(-群)は158名で、外来分裂病患者の約15%に身体接触行動を認めた。②調査時の平均年齢は(+群)26.7才、(-群)36.0才、平均発症年齢は(+群)19.2才、(-群)24.2才で、共に(+群)が(-群)より低い、③(+群)では女性患者が多い。④従来診断:(+群)では破瓜型が56.3%、

妄想型は0%。(+)群では、破瓜型25.9%、妄想型35.4%、分類困難型31%。⑤DSM-III-R分類:治療開始時点:(+)群では分類不能型が65.6%と圧倒的に多く、妄想型は0%。(+)群では分類不能型が49.4%、ついで妄想型が31%。⑥調査時点:両群共に残遺型が最も多い(各40.6%、50%)。寛解期にある患者が両群共に約15%の率で存在した。⑦接触行動の発現時期:初期陽性症状が消退した後の疲弊抑鬱期。⑧両群を通じて、母親に対してはPositiveに評価する患者が多い(各68.7%、48.7%)。父親に対しては、(-)群ではNegativeにとられる患者が46.8%だが、(+群)では離別や無回答、また父親が来院しない症例が多く、父親との関係の希薄さがうかがえた。

【考察】我々が、分裂病患者の中に、主に母親に対して身体接触を求めていく患者がいることに注目したのは、そうした患者の臨床特徴をとらえ、その行動の意味を深めることで、予後の予測や治療に役立てられないか、という仮説を立てたからである。

今回の調査では、身体接触行動を示したことのある患者は、外来分裂病患者の約15%を占め、破瓜型近縁の若年発症の患者に多いという結果が得られた。病型の比較では、治療開始時には(+群)では破瓜型もしくは分類不能型が多く、(-)群では妄想型がかなりの部分を占めるという病型分布の差が認められたのに対し、調査時には、両群共に残遺型が最も多く、(+群)40%、(-)群50%と、近似した値であった。寛解状態にある者の率も約15%でほぼ同率であった。すなわち、(+群)も(-)群もその予後に著しい差異はないという結果が得られた。

今後はさらに、Matching Methodを用いた比較や、(+群)の個々の症例の経過をprospectiveに観察することが必要であろう。

#### 5) 抗精神病薬服用患者における高脂血症、肥満、糖尿病の発生とインスリンとの関係について

角田 雅彦・山口 勇司  
大橋 正和・田宮 崇(田宮病院)

今回われわれは、抗精神病薬服用患者における高脂血症、肥満、糖尿病の発生メカニズムについて検討した。対象はT病院に入院中のDSM-III-Rの診断基準で精神分裂病と診断された27例(男18例、女9例、男性の4例は糖尿病で経口糖尿病薬を服用している)で、平均年